岡村病院
院内報

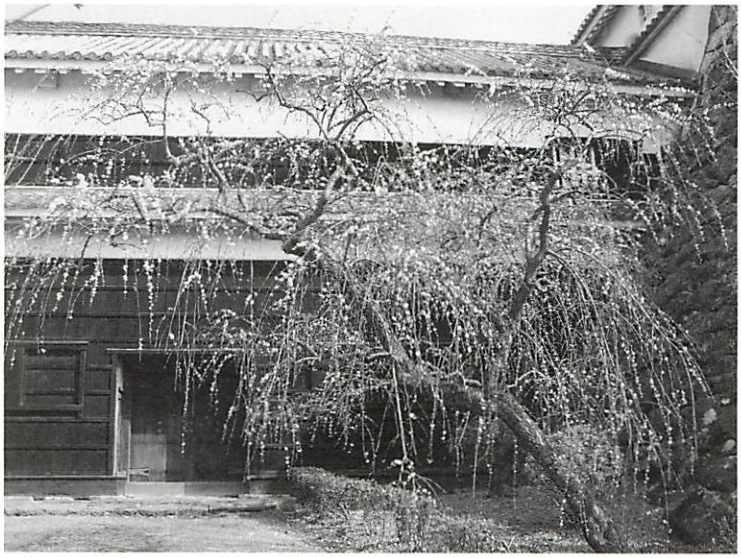
歩（あゆみ）

第 55 号

発行　岡村病院
編集　歩(あゆみ)
　　編集委員会
平成21年4月1日

岡村病院基本理念

私たちは、患者様本位を第一に考え
高度な専門医療技術をもって
地域社会に貢献することを目指します。



「高知城・枝垂れ梅」
岡村 高雄院長 写

今月のことば

「意識的・積極的」

毎日同じ仕事をしていますと、つい無意識・習慣的になってしまいます。しかし、毎日している事でも、これでよいのか、もっと他にやり方はないのか、と意識的・積極的に考え、取り組んでみてはどうでしょう。

仕事の仕方にしても、人に接する態度や言葉づかいにしても、もっとこうした方がよいと気付かされる事があるのではないでしょうか。

しかし、気付いてもそのままにしている事がよくあります。大事なのは、実行です。

人間国宝に選ばれたある人が「どこまで行っても、これでよいと言うことはありません。死ぬまで勉強です」と話しておられるのを聞いた事があります。

毎日を無意識・習慣的に過ごすのと、意識的・積極的に生きるのとでは、その結果に大きな差が生まれると思います。

医療者と患者さんのギャップ

院　長　岡村高雄

最近、がん患者さんに対する医療者と患者さんのアンケート結果が出ました。この調査は東京大学医学部附属病院の放射線科外来を受診中のがん患者450人、ランダムに選ばれた東京都民1000人、東大病院でがん診療に関わる医師155人、東大病院でがん診療に関わる看護師470人を対象にアンケート調査として行われたものです。がん患者、一般市民、医療者ともに回答率が比較的共通している項目は「からだの苦痛を感じない」「おだやかな気持ちでいられる」「自宅や病院など、自分が望む場所で過ごす」「楽しみになることがある」「心残りがない」「家族から支えられ、家族と一緒に過ごす」「信頼できる医師・看護師がいる」「生き方や価値観が尊重される」「『もの』や子ども扱いされない」ことなどを望ましい死として必要と回答していました。しかし、一方でがん患者・一般市民と、医療者で必要との回答率が異なる項目も認められています。「最後まで病気と闘うこと」を望ましい死として必要とした医療者は２～３割であったのに対して、がん患者では約８割が必要と回答していました。また、「やるだけの治療はしたと思えること」という設問に対しても、必要との回答はがん患者で高く（約９割）、医療者の５割程度と違いがみられています。これらの結果から、医療者は患者さんとのギャップがあることを自覚する必要があると思います。私は癌治療の専門家ではありませんが、この内容は最近の傾向として「癌」の告知をし、予後を含めて全ての結果を明らかにし、患者さんに伝える事がインフォームドコンセントの基本的な考え方とされております。しかし、科学的であることと患者さんの気持ちを含めて医療を行うこととはまた別の事でもあります。例えば手術、化学療法、放射線治療等を行い、効果がない場合に医療者は「もう治療の方法はありません」「私どもの所にこれ以上受診しても意味がありませんから、再診は必要ありません」等の話を患者さんからお聞きすることがあり、これと一致しているように思えます。最後まで病気と闘いたいと思っている患者さんの声にどれだけ応えているか再度、考慮する必要があると思います。

ある癌になった医師が述べている事は、多くの医師は多忙であり、患者となった医師も順調に回復し、比較的軽い症状であったにも関わらず、「医師に来てもらうだけでも、ありがたい」と感じたと述べています。医師は患者さんの状況を看護師記録や検査データ等を看護師詰め所で把握でき、最近の電子カルテであれば病院の何所にいても把握可能な状態になっています。しかし、患者さん側からすれば、そういうことは全く見えませんし、そこで医師が病室に来てくれると、「患者さんは『ケアをしてくれている』と感じられるのだ」と自分が入院してみてわかったと述べています。この医師が患者さんを把握していると感じていることと患者さんが実際に感じている事とのギャップを感じさせます。その他にも日常診療の場でも多くのギャップを感じる事があります。例えば、一般的によく知られている病名に関して医療側は新聞、テレビ等で頻繁に報道されており、身近に聞く病名のためよく知っており、基本的な知識は十分にあると考えます。所が実際患者さんに対して質問をすると、殆どの病名で正確な知識を有している場合が少ないのです。この現象は当然の事で、医師でも専門外の病気に関しては詳しくないことが多いのが現実です。医療側は常に我々の考え方が正しいとの先入観を捨てて、謙虚に患者さんの言葉に耳を傾ける必要があります。ギャップを埋める方法は十分なコミュニケーションを取ることと思います。少しでも病室に出向いて、ちょっと声をかけるだけでも、患者さん

側としては「あー、気にかけてくれている」という思いがあります。多くの会話で患者さんの本音が聞こえる場合が多いと思います。医療者としてそういったことを心がけていただきたいと思います。このような現状を変えるためには、もっとマンパワーも必要ですし、本来お金もかけなくてはいけないと思います。ところが日本の対 GDP 比の医療費は、先進国でもっとも低いグループに入っていて、医療費があまりにもないがしろにされています。今後も医療者と患者さんが一体となって、国に対して訴えていくべきだと考えています。

ピロリ菌と人類

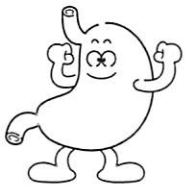
消化器内科医長　植村信隆

ピロリ菌（ヘリコバクター・ピロリ）をご存じですか？よくわからなくてもその名前をテレビなどで耳にしたことはあると思います。1982 年に発見された、人間の胃の中に住みつく細菌で、胃かいようや十二指腸かいようを引き起こす原因の一つです。最近では胃癌発生のリスクを高めることもわかってきました。

そんなことを知ると恐ろしい菌のようですが、実はとても多くて日本人だと 40 歳代以上の人はほとんど胃の中にピロリ菌が住みついています。ピロリ菌がいる人みんなに悪さをするわけではなく、一部の人だけに病気を起こすようです。

このピロリ菌、人類とのつきあいは長くて、6 万年前頃に人間の祖先がアフリカで生まれ、世界に移動して広がり始めた頃にはヒトの胃の中にいたようなのです。最近ピロリ菌の遺伝子を調べることで、人類の起源を研究することの手がかりになることがわかりました。人類が進化するとともにピロリ菌も変化して、アフリカから分かれた地域の人間集団ごとにピロリ菌も異なるようです。たとえば 5 千年くらい昔には、台湾付近から出発してフィリピンを通りニュージーランドやポリネシアに渡った人たちがいたことがピロリ菌の遺伝子でわかりました。

このように人類とともに共存してきたピロリ菌ですが、やっぱり人体にとってはいない方が良いようで、現在日本では胃かいよう・十二指腸かいようにピロリ菌を除菌する治療が保険で認められています。



最近日本人の胃癌とピロリ菌との関連が証明されたことで、「ピロリ菌のいる人はすべて除菌を奨励する」というガイドラインが日本ヘリコバクター学会から昨年末に発表されました。これからかいよう以外の人に除菌治療の保険が通るのも近いかも知れません。

最近の若い人はピロリ菌を持っている割合が少なくなっています。その結果胃かいようも減ってきている印象です。日本が衛生的になってきた結果だと思います。

胃腸の病気はピロリ菌だけが原因ではありませんが、すこしでも病気が少なくなればいいですね。

特別寄稿 藤川先生の短編小説

「矢筈峠（やはずとうげ）」

藤川クリニック　院長　藤川　義久

この夏高知市では7月4日の梅雨明けから49日間に亘り連続真夏日を記録したが9月下旬に台風13号が過ぎてからは蒸せるような暑さはなくなり、ようやく冷涼な大気が空を満たすようになっていた。

ある日の午前8時半、健はグループホーム“はなみずき”の施設長室のドアをノックした。

「どうぞ入って下さい」健が部屋に入ると施設長の北岡が温厚そうな笑顔を向けた。年齢は78歳、白髪混じりの頭で縁の丸い眼鏡をかけている。

「失礼します。真田さんのケースレポートを持って来ました」

「ご苦労様、真田さんのその後はどうですか？大分落ち着かれましたか？」

「こちらに入所されてからもう1ヶ月が経ちますがまだ全然と言っていいくらい施設に馴染む気配がありません」

「前回検討した時からあまり良くなっていないんだね」

健はこのグループホームの職員で今年26歳になる。178センチの上体をやや折って申し訳無げに言った。

「はい、残念ながらまだ私達の努力が足りないようです」

「どんな問題点があるのかね？」

「一番問題なのは入居者と打ち解けないで毎日部屋の中に籠って出て来られないことです。それと時々徘徊がありまして先日も1時間近く職員で捜索して近くの空いた工場の中でようやく発見したことがありました」

「それは気を付けないといけないね。年齢は85歳でしたよね、ところで長谷川式知能評価はやってみましたか？」

「はい、10点でした。認知症はそれほど悪くないのでどうして状態が良くならないのか悩んでいます」

「生活歴はどうですか？過去の出来事で何か参考になることはありませんでしたか？」

「それが色々調べてみたのですが両親は亡くなっていて彼女は一人娘ですし、親戚も無いので何もつかめませんでした」

「しかし何か手がかりを見付けないことにはね。何時も君に言っているけど、人それぞれには必ず歴史があるからね、その物語を理解しなければケアは出来ないのだよ」

「分かりました。その点に充分気を付けてお世話していきます」

健がリビングルームに戻ると職員の真弓が入居者にお茶をついで回っていた。

「今日は全員で矢筈峠までドライブの予定だけど道子さんも朝食は済みましたよね」

「はい、車の準備も出来ています」

中型ワゴン車に入居者を乗せて3人の職員が同乗して健の運転で出発した。

矢筈峠は物部川の支流である上韮生川（かみにろうがわ）の中流域から徳島に抜ける林道の県境にある峠である。笹温泉を過ぎ、明賀（みょうが）の集落を後にすると九十九折（つづらおり）の狭い山道が続いた。この道はその昔幾多の犠牲者を出して完成され、その後林業が盛んな時代には多くの杣人（そまびと）で賑わうこともあったが現在では登山客が行きかう以外はひっそりとした佇まいとなっている。

眼前に迫る山並の正面に特徴のある形の

山が見えてきた。コバルト色に澄み渡った秋の青空が、緑の濃い山肌とコントラストをなし、山稜近くに幾つかある大きな岩が明るい日差しを浴びて白く光っていた。その矢筈峠と綱附森の間の鞍部になった所に矢筈峠があった。

峠に着くと入居者の世話を職員に任せて健は一人道子に付き添った。9月下旬ともなるとこの標高では真昼でも寒さを感じるほどだった。持って来たカーディガンを道子に着せ手を繋いで峠の付近を散策した。風は無く路辺の雑草はまだ濃い緑色をして透徹とした空気を貫く日差しが路上の石に目映く反射していた。

峠から頂上の向こうへとなだらかな坂道が徳島の祖谷村に向かって下っていた。その坂道を道子と並んで歩いていた健は彼女の足取りが何時もと違うことにふと気付いた。坂道なので道子が転ばないように注意していたが、そのような心配は全く必要でないと思われるほど確かな足取りだった。健は道子の顔を見た。それは普段よく見る生気の無い澱んだ目ではなかった。逆に水底に落ちている水晶が光るかのような小さな輝きを目の底に湛えていた。

なおも道子は坂を下って歩き続けようとしていた。

「道子さん、そろそろバスに戻りましょうか」帰りの登り道を案じて健が声をかけた。何時もならはっきりとした返事を返さない道子が応えた。

「そうしましょう」聞き取りにくいほどの細い声だったが健はその中に言い知れないぬくもりを感じた。その時、「アリラ……」道子が声を発した。

「え、なんと言われましたか？」健の問い返しに道子は応えず依然としてしっかりとした足取りで峠に向かって歩いて行った。

峠では入居者と職員が集まって道端の花を摘んでいた。

「そろそろ帰りましょうか。大分寒くなってきましたね」真弓が菫草のような紫色の花を手にして立っていた。

疲れで皆が寝静まった帰りの車中、運転する健の耳に先ほど道子が言った声が妙に残っていた。（確か、“アリラ”と言ったようだった）

ホームに帰り着いた時には既に午後3時を過ぎていた。入居者をバスから降ろした後健は北岡の部屋に向かった。机を前にして書き物をしていた北岡は鼻眼鏡の上越しに健を見上げて言った。

「お帰りなさい。無事に行って来ましたか」

「はい、天候も良くて素晴らしい眺めで皆喜んでいたようです」健が応えた。

「それは良かった。ゆっくり休んで下さい」

健は部屋を出ようとしたが、ふと何かを思い出したかのように立ち止まって北岡を振り返った。

「そういえばひとつだけ気に懸かることがありました」健は峠での出来事を北岡に話した。

「アリラと言ったのですね」北岡はしばし考えていたが何か思い当たったとでも言う風な素振りをして本棚に向かい、間もなく小さな山のガイドブックを取り出して暫し頁をめくっていた。

「やっぱりそうだったか」呟きながら健の傍に来て開いた頁を指で示した。「私は若い頃よく山を歩いたがね。矢筈山にも数回行ったことがあったけどもうすっかり忘れていた。今の言葉で想い出したんだ」

健は驚いて言った。「矢筈峠に別の名前があったのですね。道子さんが言った言葉はこれかも知れません。もしそうだとすれば道子さんの生活歴の糸口が見つかるかも知れません」

「君は知らないだろうけどその言葉には歌も

ありますよ」北岡が言った。

それから一ヶ月が経った。この日はホームの毎年の恒例となったカラオケ大会の日だった。入居者とその家族、職員が歌っていた。健はカラオケが苦手で無理をして北国の春を歌ったが自分の歌どころではない心境だった。

何人かが歌い終わり真弓が司会のマイクを握っていた。

「では次に歌う方を紹介します。真田道子さんです。皆様どうぞあちらをご覧下さい」

真弓がリビングルームから見通せる道子の部屋を指し示すと同時にドアが開いた。赤とピンクの色が美しいチマチョゴリの服を着た道子が部屋から現れた。リビングの中にため息とも驚きともつかない声がさざめいた。道子は滑らかな足取りでマイクの前に立つと歌い始めた。

「アリラン　アリラン　アラリヨ　アリラン峠を越えて行く　私を捨てて行かれる方は
十里も行けずに足が痛む……アリラン
アリラン　アラリヨ　アリラン峠を越えて行く　あそこ、あの山が白髪山だが　冬至師走でも花ばかり咲く」

三番まで歌い終わると大きな拍手がリビングルーム内に沸き起こった。

「お上手ね。私この歌哀愁があって懐かしい気持ちがして好きなのよ」

「それにあの衣装の綺麗なこと。あれ韓国の民族衣装でしょう？」口々に話す言葉がそこここに聴かれた。

健は北岡と並んで後ろの方に立っていた。

「彼女はきっと故郷のことが忘れられなかったんだよ。20歳の時に国を離れたからね」北岡が言った。「周りに誰もいなくなってさぞさびしかったんだろうね」

「あの峠が朝鮮から来た人達の手で造られてアリラン峠という名がつけられたとは知りませんでした。しかも彼女のお父さんが工事に加わったとは。最近は道子さんもすっかり打ち解けてどうしてもこの歌を歌いたいと練習していました」

「故郷の歌を歌うのは格別のものがあるのだね。我々も古い歌を大切にしないといけないね」

「日本では小学校で習う唱歌も随分変わりましたし」

「私たちが習った歌はもう教科書にないらしいね。君たちの年代の歌というと尾崎豊かな」

「院長が尾崎豊をご存知とは驚きました」

「馬鹿にしちゃいけないよ。だが歌のことでも世代の間で共有出来るものが無いのは寂しいことだね。果たして日本にそんな歌が残っているだろうか」

「“荒城の月”とか“さくら”とかがありますね」

「君こそそんな古い歌をよく知っているね」

「グループホームやデイでお年寄りから聞いて覚えました」

マイクの周りには皆が集まって道子の衣装に触りながら話しかけていた。道子の顔には微笑が浮かび目には喜びの輝きが宿っていた。

完

血管検査室開設から8ヶ月を経て……

血管検査室　浜田佐智子

高齢人口の増加と食生活の欧米化により血管の病気はますます増えています。わが国における3大死亡原因である病気（ガン、脳血管障害、心臓病）のうち2つが血管に関連した病気です。

血管の病気には動脈が広がり、ついには破裂する動脈瘤と動脈が閉塞して血液が流れなくなる閉塞性動脈硬化症がよく知られています。動脈の病気の多くは動脈硬化症によって発症します。動脈硬化症は複数危険因子症候群とされ、高コレステロール血症、高血圧、糖尿病、喫煙、ストレスなどの複数の因子が重なり関与しあって発生し増悪することが明らかになっています。動脈硬化症の危険因子を除去、軽減することによって動脈硬化病変の進展を防止し、血管病の予防・診断・治療には多角的視野で対応することが必要となっています。

閉塞性動脈硬化症の人は脳や心臓にも高い頻度で血管の病気が起きており、また、平均寿命が短いことが知られています。動脈瘤は気づかずに放置するとついには破裂し死亡する病気ですが、早期に発見することにより安全に治療することができるようになっています。静脈の病気（静脈瘤と深部静脈血栓症あるいはこれと関連して起きる肺塞栓症）で悩んでおられる方も多いと思いますが、多くの場合、簡単な手術や弾力ストッキング装着で驚くほど症状がよくなります。

毎日多くの患者様が来院されますが、閉塞性動脈硬化症で既に足の指から甲などに潰瘍ができたり、壊死がおこって初めて来院される方がほんとうに多いです。これは、動脈硬化の最終ステージでCLI（重症下肢虚血）と診断されるのですが、やはり予後の良し悪しの上でも、もっと早い段階で受診されますよう血管検査室より希望するものです。

当院では、「血管の病気」に対する予防、診断、治療について、各専門分野の機能を集中させ「血管の病気」を早期に発見し治療を行うことを目的として「血管検査室」を設立いたしました。血管病の診断を無侵襲的な方法（注射などの処置を必要としない方法）で検査をします。血管の病気を早期に発見し早期治療を行うことにより患者様の不安・心配・悩みを取り除いて快適な生活ができますようお役立てください。

閉塞性動脈硬化症の重症度分類

1度は軽い冷感、痺れ感のみで大きな血流障害はありません。
2度は間歇性跛行といって、歩行によって下肢の特にふくらはぎが痛んだり、また動かなくなったりする現象です。人の下肢の筋肉は歩行運動により安静時の5－10倍の血流を要求しますが、血管閉塞の為十分量供給できないことが理由です。100 m以下の歩行で症状が出現する例は重症です。
3度は何もしなくても、横になっていても痛みがある場合をさし、4度に高率に移行します。
そして4度とは足が壊死に陥った状態をさします。

患者さんからのお便り

死線からの復帰

秋澤　孝子

今年の1月、私は90才の誕生日を迎えました。教会・学校・同窓会・友達・息子達から祝ってもらいました。私は今肉体的にも精神的にも健康で、週2回教会へ行き、天気のよい日は家で1時間余り土をいじり、雨の日にはお菓子作りをしています。暮れには雨がなかったですが、この所、時々雨にめぐまれています。先日は待望のアップルパイを焼いて楽しみました。

久し振りに会った知人に、「お悪かったんですって？」といぶかしげに尋ねられると、「はい。2、3年前に死んでいました」と答えています。

それは、私が87才の年の9月、息苦しくて危険な状態になり、かかっていた病院から急遽、岡村病院へ移され、入院、集中治療室へ入れられました。そしてその夜は、後で聞いたのですが、息子達も病院で泊まっていたということです。

今にして思えば、その夜の勤務の看護師さんが、つききりで看取って下さり、翌朝交代の時は心温まるねんごろなお別れのご挨拶をいただいて、この方は何処かへ行かれるのかと思ったことでした。

今迄、毎朝ラジオを聞いていましたので、ここでも聞きたいと言いましたら早速、翌日から聞くことが出来るようにしてくれました。口からの食物は何もなく、渇くので氷の小片を口に入れてもらいました。家の梅で作った梅ジュースが氷の代わりに欲しいと申しましたら、すぐに実現しました。食物は何も口にしないので、食べたくなったものを、おいしく食べたと想像して、忙しい看護師さんに役にかかって聞いてもらいました。

「赤毛のアン」の様に、小さな喜びを次々と見つけて、幸せな入院生活を送りました。

そして2ヶ月。再び生きることができる私は、この病院の皆さんに本当に感謝しています。

私とドストエフスキー

看護部長　下山　美知

長い間、それはいつも手を伸ばせばすぐ届くところにありながら遠い存在だった。この高名な作家は、それゆえにかえって近寄りがたかった。

思いがけず病を得て入院生活を送ることになった。「さあ、ドストエフスキー！」と意気込んだ。書店に並んでいる彼の単行本を全て買い届けて貰い、まずはかねてより念願だった彼の最後の作品『カラマーゾフの兄弟』から読み始めた。重厚なテーマにたちまち引き込まれる。友人は青春の文学だと言う。でも、私には解らない。「どこが青春？」「青春とは青春よ。青春の饒舌、青春の思想的昏迷と言った類の青春。」ドストエフスキーが饒舌であったり昏迷に満ちているのはよく知られている。その奥行きと

広がりの中で、神の恩寵を垣間見る僥倖が『カラマーゾフの兄弟』の全篇に書き連ねられている。「神」とは、「有神論・無神論」とは、そのはざまで揺れる心の葛藤。ドストエフスキーが多くのことを私に問いかけ始める。

私は、かつて志賀直哉に恋をしていた時期があった。尾道や大山を尋ね歩き、時任謙作に想いをはせた。今もこの想いは色褪せることなく、彼の世界は私の一部になっている。同じように、この偉大なる文豪ドストエフスキーも私の一部になるだろうか。いつの日かロシアの地を訪れ彼の世界を尋ね歩く、その姿を空想しつつドストエフスキーと共にあった私の闘病生活は終わった。

旅の思い出（塞翁が馬）

4階病棟　鈴木　千恵

２年前、看護師の国家試験直後のストレス発散の為、また、働き出したら旅行にも行く暇もないと思い、２回目の独り旅（今回はオーストラリアのシドニー）を決行した。

旅行中、トラブル続きだった。

ブルーマウンテンズ・エクスプローラーバス（カトゥーンバ駅～ブルー・マウンテンを巡回）の中にカバン（パスポートを入れていた）を忘れた。カトゥーンバ駅前のバスチケット売り場は閉まっていたが、人影が見えたため、ドアを叩いてあけてもらった。バスの運転手に電話をかけてくれ、運転手が自家用車でカバンを持ってきてくれた。しかし、そのため、帰りの列車（シドニー行き：片道２時間）には乗り遅れた。

帰国の日、スーツケースが地下鉄駅のエスカレーターにうまく乗らず、７、８段上から転落し、顔を切った。出血していたので、空港でメディカル・センター（医務室）に行くように言われ、どうにか行ったら、早朝のため閉まっていた。しかし、機内では、転落したことを知ると客室乗務員は親切だった。

航空会社のカウンターでは、定員を超えた予約をされており、「次の飛行機でもいいか。５分前まで待って欲しい」とのこと。お詫びと言う事で、コーヒー券、10ドルの朝食券、150ドル分の買い物券をもらった。最終的には、予定通りの飛行機に乗れたのだが。

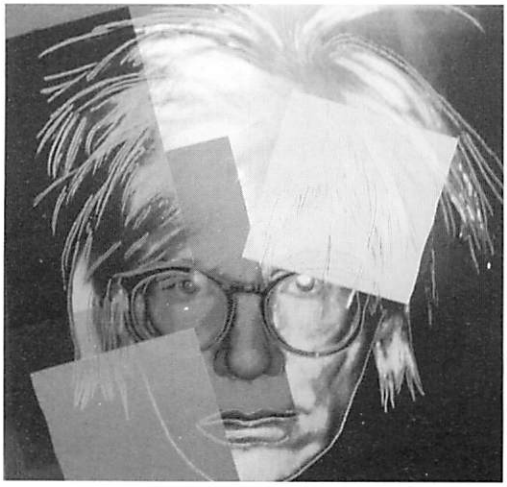
「人間万事塞翁が馬」を実感した。

【人間万事塞翁が馬】中国の古書「淮南子（えなんじ）」にある話

国境の塞（とりで）の近くに、占いの上手な老人が住んでいた。飼っていた馬が隣の胡（こ）の国へ逃げてしまったので人々が見舞いに行くと、老人は「これは幸いの基になるだろう」と言う。はたして数ヵ月後その馬は胡の国の駿馬を連れて戻ってきた。人々がお祝いを言うと、今度は「これは不幸の基になるはずだ」と言う。老人の子は馬に乗るのが好きで、その馬に乗っていて落馬し、足を折ってしまった。人々が見舞うと「これは幸いの基になるだろう」と言う。そうして一年後、胡の国の軍隊が攻め込んできた。若者たちは弓矢で防戦したが、10人中９人が死んでしまった。しかし、その子は足が不自由だったため戦わずにすみ、親子ともども無事であった。

人生には幸不幸が定まりなく変わり易いということです。　――――　編集部

「アメリカ現代美術展」のご案内



写真：
「アンディ・ウォーホルセルフポートレイト」
ルパート・J・スミス作

日頃より、病院内に絵画を展示しておりますが、今回は、「**アメリカ現代美術展 ーアンディ・ウォーホルからロイ・リキテンシュタインまでー**」を開催致します。ヨーロッパ美術からの影響を抜け出し、自由闊達で革新的な精神に基づき独自の世界を築いたアメリカ現代美術は魅力的な作品を生み出し、人々に驚きとエネルギーを与えています。アメリカ現代美術史で重要な役割を担っている、アンディ・ウォーホル、サム・フランシス、ジャスパー・ジョーンズ、ブルース・ナウマン、ローゼン・クイスト、フランク・ステラ、ロイ・リキテンシュタイン等の作品を展示しておりますので、その独創性と魅力を是非この機会にご覧になって頂ければと思います。

期　間：3月8日（日）　～　4月12日（日）　＜12：00　～　17：00＞
場　所：病院内1・2階廊下
入場料：無　料
休館日：な　し
※ 受付テーブルに「作品配置図」を準備しておりますのでご利用下さい。

●ニューフェイス●

西　野　由佳梨 さん
医療事務
趣味：スポーツ、映画鑑賞

恒　石　房　子 さん
3Ｆ病棟　看護助手
趣味：旅行

よろしくお願いします。